

推薦入試の志願者数は 国公立大 8%増、私立大 2%減

国立大は教員養成系で志願者増、私立大の薬は人気急落

旺文社 教育情報センター 平成 18 年 1 月

平成 18 年度“新課程”入試の前哨戦として、公募制推薦入試と AO 入試はどのような結果が出たのか。当センターが全国の国公立大および私立大に行ったアンケート（締切日：17 年 12 月 22 日）によると、推薦入試の志願者は国公立大が 8%増、私立大が 2%減と対照的な結果となり、私立大の方は倍率ダウンでやや易化した模様。

一方、AO 入試は志願者 8%増に対し合格者は 5%増で、倍率はほぼ 17 年度並みだった。

推薦入試 私立大は倍率ダウンで“やや易化”!?

当センターでは、国公立大のセンター試験を課さない推薦（以下、セ試免除推薦）と、私立大の公募制推薦について、18 年度入試結果の調査を行った。17 年 12 月 22 日現在（本調査締切日）の、国公立大 76 校（志願者数約 1 万 9 千人）、私立大 181 校（同約 15 万 8 千人）の集計データによると、志願者数は 17 年度比で国公立大 8%増、私立大 2%減と、対照的な結果となった（17 年度推薦入試の最終結果は、国公立大・私立大ともに 2%減：文部科学省集計）。

[国公立大：セ試免除推薦] 志願状況を国立・公立の別にみると、国立大 9%増、公立大 7%増。根強い国公立大志向がうかがえる。学部系統別に見ると、今後の教員需要の拡大を見越して、教員養成系学部の志願者増が目立ち、医療・看護も相変わらず人気が高い。他方、合格者数も国公立大全体で 7%増えたため、倍率（志願者数÷合格者数）は 17 年度 2.5 倍、18 年度 2.6 倍とほぼ前年度並みであった。

[私立大志願状況] 私立大の場合は、四年制大学の受験生数の減少（約 6%減：本誌予測）と、AO 入試の実施校増加や募集枠拡大を考えると、志願者減は小幅に留まったといえる。

地区ごとの志願状況をみると、大学数の多い首都圏で 7%減、京阪神で前年度並みとなった。おもな大学で、とくに目立った志願者増減は次の通り。

首都圏：志願者増 = 立教大 31%増・早大 13%増など、志願者減 = 国士館大 19%減・大東文化大 21%減・東海大 11%減など / 京阪神：志願者増 = 京都産業大 6%増・同志社女大 6%増・龍谷大 57%増・神戸学院大 28%増・武庫川女大 13%増など、志願者減 = 大阪経大 27%減・大阪産業大 27%減・大阪商大 24%減・近畿大 11%減・摂南大 15%減など。

志願者増の大学のうち、立教大は増設学部（現代心理・経営の 2 学部）における新規実施、

早大は社会科学部の出願資格緩和（評定平均値 4.5 → 4.0）、京都産業大は「基礎評価型」の導入（従来の「総合評価型」と異なり調査書を点数化しない）、龍谷大は「配点セレクト方式」の導入（出願時に配点が2倍になる科目を選べる）がおもな要因となった。

学部系統別に見ると、薬の大幅減（約3割減）が目立つ（例：共立薬大45%減、大阪薬大18%減、神戸薬大20%減など）。薬剤師養成課程の6年制化を敬遠し、薬学部志望の女子が医療・看護などへ流出した模様。法、理工も昨年度に引き続き人気ダウンしたが、経済系はほぼ前年度並みと堅調、景気回復を受けて人気復活の兆しが見られる。

[私立大合格者状況] 一方、合格者数は17年同時期比で6%増となった（17年度最終結果は1%増：文部科学省集計）。早期に定員確保したい大学側の意図からか、志願者減でも合格者を多めに出す傾向が強まったようだ。

このため、私立大推薦入試全体の17年12月現在の倍率（志願者数÷合格者数）は、同一校比較で17年2.8倍、18年2.5倍とダウンした。とくに倍率ダウンが顕著なのは、大東文化大（2.4倍→1.8倍）、愛知学院大（2.4倍→1.8倍）、大阪経大（6.9倍→4.8倍）、近畿大（4.2倍→3.3倍）、桃山学院大（4.4倍→3.9倍）など。倍率面を見る限り、18年度の私立大公募制推薦は「やや易化した」とみていいだろう。

なお、国公立大および私立大の志願者・合格者動向については、p.3のグラフ（国公立大セ試免除推薦...グラフ、私立大公募制推薦...グラフ）もあわせて参照のこと。

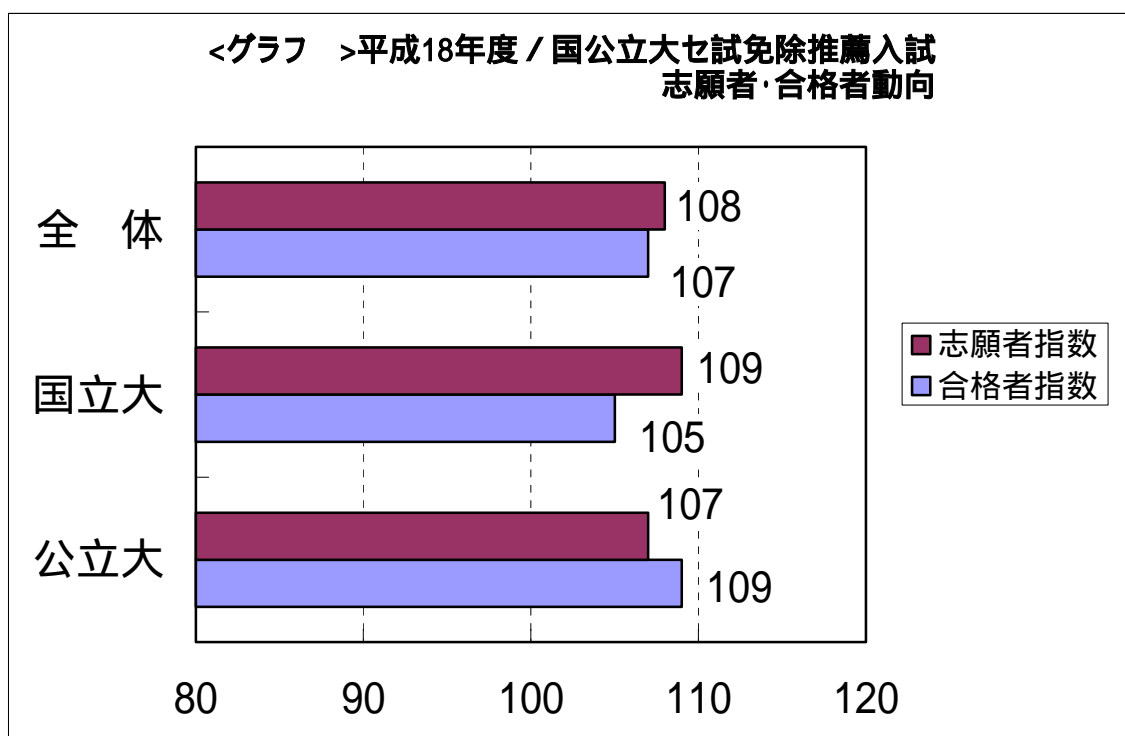
AO入試 国・公・私立大の志願者数8%増、合格者数5%増

18年度にAO入試を実施した大学は418校（国公立大44校、私立大374校。17年12月時点の当センター調査による）で、全四年制大学（711校）の59%にあたる。

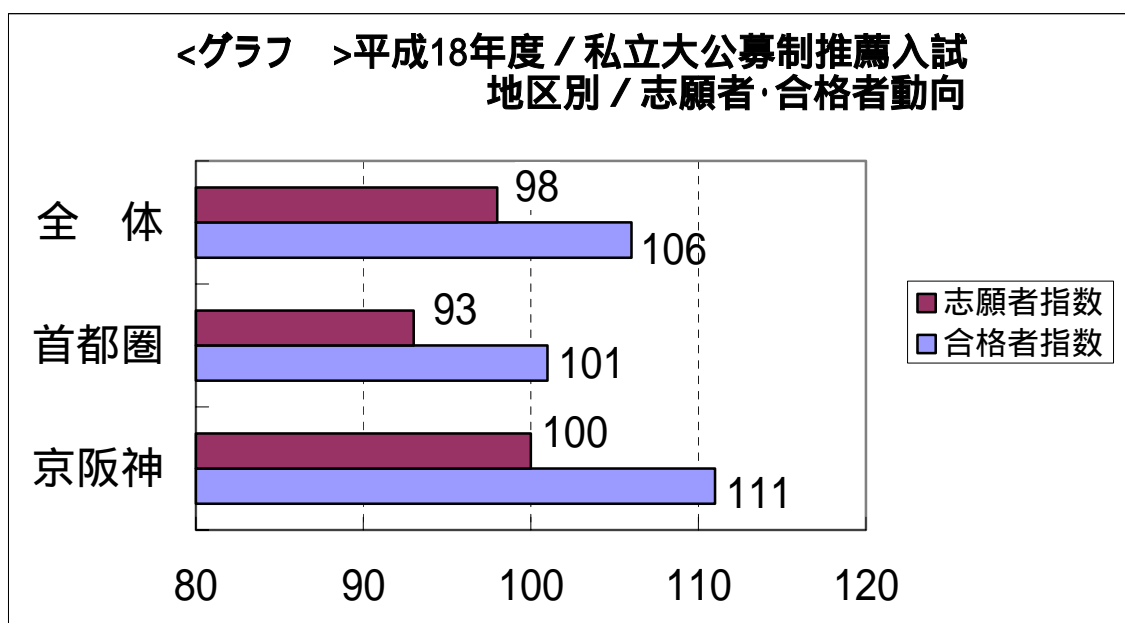
17年12月22日現在の集計（140大学。志願者数：約2万3千人）では、AO入試全体の志願者数は17年度同時期に比べ8%増加した（17年度最終集計では21%増）。実施大学・学部等の増加に加え、募集枠拡大が盛んなことも志願者増につながった。一方、合格者数も全体で5%増加した（17年度最終集計では14%増）ため、倍率（志願者数÷合格者数）は、全体で17年度2.4倍、18年度2.5倍と、ほぼ前年度並みであった。

AO入試のうち、本人の入学意志を重視する「対話型」では、正式出願前に「内定」する場合が多く、公表倍率はほぼ1倍台だが、国公立や私立大上位校、医療系に多い「選抜型」では、次のような大学・学部で高倍率の激戦となった。

新規実施の慶大 - 法(6.4倍)、甲南大 - 経済(8.0倍)をはじめ、岩手県大 - 看護(9.8倍)・社会福祉(7.3倍)、明海大 - 歯(8.3倍)、慶大 - 看護医療(15.8倍)、明治学院大 - 心理(18.3倍)、早大 - 政治経済(5.2倍)、金沢医大(13.3倍)、同志社大 - 文(7.1倍)・社会(5.8倍)、関西大 - 法(8.7倍)など。



(注) 志願者数・合格者数とも、17年入試の人数を100とした指数。



(注) 志願者数・合格者数とも、17年入試の人数を100とした指数。